

周産期育児支援の研究 第一報

－妊娠・出産・育児期の切れ目ない支援の実践－

A Study of Perinatal Child Care Support of Pregnant Women and Mothers (First report)

岡 いくよ

Ikuyo Oka

Abstract：地域での20年の育児の支援活動を経て、サポートが分断されやすい妊娠期、出産期、授乳期の継続した育児支援を中心に、活動するため、助産院「マタニティガーデン」を開設した。マタニティガーデンでの実践と利用者アンケートを実施し、利用者は受診するほどでもない不安を解消し、ゆっくり妊娠出産育児について語り合える人や場所、同じ立場の人とのつながりを求めて来所し、その実践の効果として切れ目なく支えることの重要性和、定期的に妊娠出産育児を学習し、同じ立場の人と出会う機会は現代の社会状況の中では重要で、効果のあることが分かった。

Keywords：育児支援、周産期、切れ目ない支援、助産師

I. 問題意識と目的

平成26年度厚生労働省概算要求の要望施策には、主要事項の第1に「子どもを産み育てやすい環境づくり」の母子保健医療対策の強化として『地域における切れ目ない妊娠・出産支援の強化』が揚げられ、産科医療機関からの退院直後の母子に心身のケアや育児のサポート等を行う産後ケア事業を含め、各地域の特性に応じた妊娠から出産、子育て期までの切れ目ない支援を行うためのモデル事業を実施することが予算化⁽¹⁾された。その背景には少子化の改善傾向がみられないことや働く女性の増加と共に、出産年齢の高齢化の持続、虐待相談件数の増加等があると推察される⁽²⁾⁽³⁾。現代の、専業主婦率は低下し、同居家族数の減少傾向など⁽²⁾、家族の基盤にも変容が生じ、本来行われていた家族内での出産前後のサポート体制が脆弱化している⁽³⁾。さらに、都市化や住居形態の変化から地域力は減退し、人と人のつながりが薄くなり、母と子が孤立しやすく、育児への負担感は増大し、さらなる支援が必要とされていると言える。

乳幼児を育てる母親は、妊娠期から授乳期のかつては母から母へと受け継がれた知恵や知識を祖父母世代から受け継がれず、成育の過程で乳幼児に接する機会もなく関わり方を知らないままに母親となり、地域からも孤立しがちで育児不安に陥りやすい⁽⁴⁾。しかも出産は生活の場から分娩施設に移行し、妊娠出産育児を支える支援者が分断されやすい傾向にある。筆者は奈良市立平城東公民館、奈良教育大学附属幼稚園、京都府相楽郡精華町等で地域の妊娠出産育児の母たちの生の声を聴く20年の育児支援活動⁽⁵⁾⁽⁶⁾を経て、2011年より大阪市中央区において助産院「マタニティガーデン」を開設⁽⁷⁾するに至った。今回は、マタニティガーデンでの実践の概要を報告し、マタニティガーデンの利用を修了する時点の利用者アンケートの記述から、開設2年間の利用者の来所に至る目的を把握し、その実践の効果を整理することを研究の目的とした。

II. 実践の概要

1. 施設紹介「助産院マタニティガーデン」について

一般に助産師の運営する助産院は、出産施設、母乳マッサージを専門に扱う施設、施設を持たず家庭訪問による育児相談や母乳マッサージを行う場合が多くを占める。マタニティガーデンは従来のモデルとは異なり、母親となる前段階の妊娠期から支援が可能な助産師の強みを活かし、サポートが分断されやすい妊娠期、出産期、授乳期の継続した育児支援に特化し、出産を扱わずに医療機関を受診するほどではない暮らしの中の不安や疑問に寄り添うことを目的に設立した。マタニティガーデンの所在地である大阪市中央区の上町台地の北端付近は、谷町筋沿いに高層マンションの建設が活発に行われ、人口増加も著しく、出生率も増加傾向⁽⁶⁾にある地域で、転入者が多い。主な支援の内容は、妊婦や乳児期の母子の個別相談と出産・育児講座の開催である。また、出張講座として子育て広場や文化サロン、百貨店等に於いても実施している。

2. 講座の概要

講座は妊婦向け、乳児期向けに分かれ、少人数で設定し講義形式ではなく、成人学習理論を応用した参加体験型学習による方法を用いている。参加者の求める知識や情報がタイムリーに提供でき、参加者個々人が取捨選択できるよう情報は限定し押し付けるとことはせずに、参加者全員で持ち寄り多角的に吟味し、参加者同士、助産師双方のやり取りで進行している。また、民間施設であるため講座は有料であるが、参加者の利便性を考慮しチケット制を導入している。施設の収容数、場の雰囲気 considers、スタッフは助産師1名で運営している。講座の詳細は表1の通りである。講座は自由に参加、欠席ができるためグループ参加メンバーは毎回固定化せず流動的である。初参加の母子が参加しやすい雰囲気、人との結びつきが緩やかなものとなるようグループ場の雰囲気には常に配慮している。不安や疑問に対処する時も押し付けは避け、即答で返さずに、他の参加者の意見を聴き、体験を共有できるよう調整している。また、ひとりひとりの乳児を、参加している母親たち全員で様々な角度から成長した点や個性を発見できるよう促し、子どもの表情を読み解き、関わり方を示しながらグループとして成熟できるような働きかけも行なっている。妊娠期から参加した場合、家庭事情で都合が悪かった場合を除き、乳児期の教室に参加し、1歳を迎えるまで月に2～4回参加を継続している。

表1 講座の概要

講座名	ねんねクラス	ハイハイクラス	マタニティクラス
開催	週1回 1時間半	週1回 1時間半	週1回 2時間
定員	母子8組まで	母子8組まで	妊婦5人まで
対象	生後8か月未満の子とその母	概ね1歳までの子とその母	妊娠中の人（時期は問わない）
主な内容	発育を促す乳児のタッチケア 手遊び、遊びと働きかけ 近況報告と子どもの成長 育児の心配ごとの情報交換 抱き方、生活リズム、環境 授乳と離乳食 個別相談 他	子どもの病気、怪我の対処 手遊び、遊びと働きかけ 近況報告と子どもの成長 育児の心配ごとの情報交換 乳児とのコミュニケーション 卒乳と幼児食 個別相談 他	個別相談、健康チェック 妊娠中の身体の変化 出産に向けての過ごし方 分娩の経過と気持ちの持ち方 育児用品の情報交換 乳児期の生活 マタニティエクササイズ 他
その他	託児なし。予約制。妊娠期はヨガインストラクターも参加。		

3. 周知方法

主に、人からの紹介とホームページ、チラシの配布により行った。活動が展開するにつれ新聞、テレビ等に取り上げられる機会があり、それを見た人が参加するようになった。さらに参加者が友達を紹介するという形と百貨店などでの出張講座を実施することで周知が進んだ。

4. 講座参加者総数

妊娠期の講座にこれまで参加した人の数は、27人。乳児期の講座に参加した人の数は、51人。妊娠期の講座から乳児期の講座まで継続して参加する人は22人である。

Ⅲ. 実践効果の検証

1. 調査対象とデータ収集の手続き

マタニティガーデンの講座に継続して参加し、1歳を超え修了するまで在籍した母親に、目的を説明し自由記述による、A3サイズ1枚の利用者アンケートを手渡し及び郵送で依頼した。回答は郵送にて返送を依頼し、負担とならないよう強制せず、自由意思であることを伝えた。

2. 倫理的配慮

質問票に研究協力依頼書を添付し、研究目的、方法、得られたデータは目的以外に使用しないこと、回答者は特定されないことを明記した。質問票は無記名で、各個人が自由意思で返送できるようにした。質問票の返送をもって研究への参加に同意したものと判断した。

3. 調査内容

自由記載による調査の内容は表2の通りである。回答を依頼した母親の負担を避けるため、質問項目を最小にした。

表2 利用者アンケートの自由記載質問票の内容

1. マタニティガーデンにお越しいただくようになったきっかけを教えてください。
2. お越しいただいて役に立ったと思ったことを具体的に教えてください。
3. 子育てのイメージや方法がお越しいただくことによって変化したことはありますか？
4. マタニティガーデンに求める改善点について具体的に教えてください。
5. あなたにとってマタニティガーデンのママ友の存在や交流は育児にどのように生かされているか差支えなければ教えてください。
6. 子育て支援に求めることはどのようなことでしょうか？具体的に教えてください。

4. 分析方法

今回は参加するにいたった動機と、講座に参加することによって役立ったと思ったことに関し分析を行い、自由記述された母親の主観的回答を質的帰納的に分析した。対象者の回答は、その意味により内容を分類し整理した。

Ⅳ. 結果

1. 回答数

マタニティガーデンの乳児向け講座に継続参加し修了まで在籍し、海外への移住、転勤などで郵送が困難になった人たちを除く29名に配布し、25名（86.2%）の回答を得た。

2. 回答者の属性

回答者の属性は表3の通りである。

表3 回答者属性

参加者の年齢	1. 25歳未満	4%	参加を開始した時期	1. 妊娠中	48%
	2. 25～29歳	12%		2. 産後2か月以内	12%
	3. 30～34歳	32%		3. 産後2か月～産後6か月	28%
	4. 35～39歳	40%		4. 産後6か月～産後8か月	8%
	5. 40歳以上	12%		5. 産後8か月～12か月	4%

参加者の子どもの数	1. 1人……………100% 2. 2人……………0 3. 3人以上……………0	参加者の親の出生年	実父…1936年～1960年生まれ (平均1948年) 実母…1942年～1960年生まれ (平均1950年)
家族数	1. 夫と子どもの核家族……………96% 2. 実家に同居……………0 3. 夫の親と同居……………0 4. その他……………4% (夫単身赴任)	実家との距離	1. 車で30分以内……………36% 2. 車で30分から1時間以内……………24% 3. 車で1時間から2時間……………4% 4. 実家は遠方……………32%

3. 参加動機

参加するに至った動機については、43の内容の回答が出された。回答を整理し、類似するものをまとめ、その回

表4 講座参加の動機（下線波線筆者）

Keyword	実際の回答の代表例
① 不安の解消	<ul style="list-style-type: none"> ・初めての妊娠・出産で分からないことばかりだったので、出産への<u>不安を解消してくれるのではない</u>かと思い、来させていただきました。 ・初めての妊娠出産で<u>不安がいっぱい</u>あったため、専門の方のお話を聞いたり、<u>相談したり</u>できると思ったから。 ・出産や育児に関して不安が多かったので<u>悩みや不安をシェア</u>できる場所がほしかった。 ・「私大丈夫なのかな」と少し<u>不安を感じる</u>ことがあったので話を聞いてみたかった。 ・母親がすでに亡くなっており、夫の両親も遠方のため、子育てについて<u>相談出来る所</u>が、あまり<u>無かった</u>ので。 ・赤ん坊と日常どのように接するのが良いのか（遊びやしつけ、発達についてなど）を<u>相談できる場</u>が欲しかったから。 ・日々気になる子育ての事を<u>相談</u>するため。
② 育児の知恵	<ul style="list-style-type: none"> ・初産で妊娠中何も育児に関することを勉強していなかったの<u>でいろいろ伺いたかった</u>。 ・<u>知識を深める</u>ため（手遊びなども含めた育児について）。 ・<u>育児の知恵</u>を教えてもらうため。 ・雑誌や本で情報はあふれているが一方通行で、<u>話せる、相談できる人</u>が身近にいない。 ・妊娠中ネガティブな情報ではなく<u>安心できるようなお話を</u>聞きたかったの<u>で</u>。
③ 病院で聞けない	<ul style="list-style-type: none"> ・病院では医者が忙しくて相談できないような相談（ex.肌あれ、機嫌がわるい、受診すべきか、食べ物をたべない）がしたかった。 ・総合病院での出産で、細かなことへのサポートが行き届いていなく、常に不安と隣り合わせでした。
④ 子育ての場所	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと過ごせる場所がほしかった。 ・できるだけお外での楽しみ方をみつけるためにマタニティガーデンのような子育ての場所を探していたので。
⑤ 友人作り	<ul style="list-style-type: none"> ・おそらく一人っ子になるであろう息子にも、出来るだけ、たくさんの大人や子どもと早くから、触れ合って欲しいと思っていたので、通いました。 ・妊婦の友人もいなかったので行ってみようと思いました。 ・同時期に出産した方たちとお話がしたかった。 ・なかなか同じ頃の赤ちゃん&ママに合う機会がなくとにかく同じ話が出来る人を探していた。 ・大阪に知り合いがなく（引っ越してきたばかり）で。 ・お家の中で子どもと二人きりで遊ぶよりいろいろなお子さんやお母さんとワイワイ楽しみながら遊びたかった。

答の代表例を表4に示している。

4. 講座に参加することにより役に立ったこと

講座に参加することにより役に立ったことについては61の内容の回答が出された。回答を整理し、類似するものをまとめ、その回答の代表例を表5に示している。

表5 参加することにより役に立ったと思ったこと（下線波線筆者）

Keyword	実際の回答の代表例
①妊娠期の不安	<ul style="list-style-type: none"> ・初めての妊娠で分からないことだらけだったけど、先生に直接<u>お腹をさわってもらおうとすごく安心出来ました。</u> ・病院でしてもらうケアとは全く違うので、私個人のお腹を見ていることが<u>安心出来たのだ</u>と思います。 ・妊娠中は<u>病院ではおどろく程サポートがなく</u>、インターネットで調べても悪い話がたくさん出てきて、分からないことが多かった ・妊娠中に、出産のイメージなどを丁寧に教えて下さったので、出産に対する<u>恐怖が薄れ</u>楽しみになるようになりました。 ・妊娠の時は陣痛が始まってから出産に至るまでの体の変化、またそれ以前の体の変化、・徴候を教えて頂き、何か起こっても対処できるという<u>安心感</u>ができた。 ・先生がいろいろ教えて下さるので出産に対する<u>不安がほぼなくなった。</u>
②出産の知識	<ul style="list-style-type: none"> ・出産に対する心かまえ ・陣痛が始まってすぐに産まれる訳ではないということ。 ・陣痛の間におちつく時間が必ずあるので、そこで呼吸をととのえること
③出産直後のケア	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>出産直後に自宅（実家）に来ていただき、母乳のケア等をしていただいたこと</u>です。 ・入院中～退院直後まで本当に辛かったですが、先生がマッサージしてくださり、授乳指導をしていただいた結果劇的に楽になりました。 ・<u>産後すぐが想像以上に大変で（軽いうつ？なのか…）相談することができてよかった。</u> ・<u>おっぱいののませかた。</u>
④生活上の育児相談	<ul style="list-style-type: none"> ・育児書の一般的な話ではなく、先生に、<u>実際に私や子どもをみてもらって、個別にアドバイスを</u>してもらえる様々なことが、私を助けてくれました。 ・<u>娘との遊び方やかかわり方を教えていただき、自宅でも実践することができました。</u> ・子供が生まれてからは、その時々に必要な遊びや体の動かし方を教えて頂けて、悩んだり不安になっても先生に聞けば大丈夫と心強かったです。 ・産後も<u>接し方をたくさん教えて頂けて、毎回たくさん質問させて頂きました。</u> ・注意すべきこと（口に物を入れる時期は〇〇な事に注意して等）トラブルの対処法（出血した際の応急処置の仕方や心がまえなど）をアドバイスしてもらえたこと ・親世代と現代では色々と変わっている子育ての仕方があるので昔の良いところを踏まえつつ専門的なお話や今の時代に合う考え方を学べたところが良かった。 ・便利グッズなどが世の中にたくさんあり逆に成長のさまたげになっていたりすることがあるなど<u>適した使い方を教えていただき役だった。</u> ・出産後もこういう場合はこうすると良いといった<u>経験に基づいたアドバイスを</u>いただけたことはささいな事もわからなかった自分には大変役立ちました。 ・うつ伏せがキライだったり、寝返りも遅かったので一人で子育てしていたら不安いっぱいだったと思いますが、<u>大丈夫だよ！</u>と言われると安心できました。 ・病院にかかる程でもない不安（離乳食食べないとか）を気軽に相談させてもらい安心できた。
⑤医療への不安	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>医者に行く前に症状の相談</u>ができたこと。 ・<u>夜間の急な発熱</u>のときの相談。 ・病院などでもらってきた不安（授乳についてや出べそなど）を気軽に相談させてもらい安心できた。

⑥ 子どもの成長、子育てへの共感	<ul style="list-style-type: none"> ・先生や他のママ達の客観的な意見で、<u>子どもの新たな面や子どもの気持ちや考えに気づくことが出来ました。</u> ・子どもの成長を共感し合うことができた。 ・他のママの意見をきくことだけで気が楽になったり、安心したりできました ・同じように子育てに悩むお母さんたちの体験を聞くことができたこと。 ・同じ悩みや喜び、<u>情報を分かち合えるママ友たちに出会えたこと！！</u> ・数か月先輩ママたちが先生に質問していることや<u>近況を聞いて自分の準備、心構えができたこと。</u> ・おだやかな心を持てるようになったこと。
⑦ 情報の入手	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>情報をシェアできる。</u> ・離乳食についての<u>情報を</u>えることができた。 ・離乳食、手遊びなどレパートリーが増えたこと ・離乳食の<u>食べさせ方やメニュー。</u> ・出産前の<u>買い物</u>
⑧ 乳児の遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・その<u>月齢に合った遊び</u>（絵本・ふれあい遊びや歌） ・おすすめの<u>絵本や手遊び</u>（歌）は購入したり実践したりしました。 ・<u>手遊び</u>を覚えることができた。 ・子どもが楽しそうに遊んでいたこと。
⑨ 友人作り	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>お友達（母・子ども）の輪</u>を広げられた ・同じ妊婦さんとお話出来たのも楽しかったです。 ・同じ妊婦さんが集まっていた ・周りにママ友がいなくて不安だったので<u>お友達</u>ができたこと。 ・4か月ころから人見知りや激しい子どもだったので定期的に<u>人と交わり慣らしていける場所</u>として良かったです ・息子の人見知りという<u>か場所見知り</u>が少し、ほんの少しですが<u>和らいだこと。</u>

V. 考察

1. 参加の動機と求められる支援

講座参加の動機はアンケートの結果に見られるように、主に「不安の解消」「育児の知恵」「病院で聞けない」「子育ての場所」「友人作り」というKeywordで表すことができた。回答から、今出産年齢にある女性たちは出産する施設だけでは十分に不安を解消できる状態になく、受診するほどでもない不安を解消し、ゆっくり妊娠出産育児について語り合える人や場所、同じ立場の人とのつながりを求めていることが分かった。

現代の育児の「出産前後のサポート体制が脆弱化している」「人と人のつながりが薄くなって同じ立場の人に居住地域で出会えない」「母と子が孤立しやすく、育児への負担感は増大している」という問題点が、マタニティガーデンを受講する目的につながっていると言える。内閣府の平成26年版少子化社会対策白書の中にある『家族と地域における子育てに関する意識調査』⁽³⁾でも、「子育てをする人にとっての地域の支えの重要性」に関しては、9割の人が重要であると回答しているが、地域の公的な支援は丁寧に一人一人の話を受け止め、生活の中での子育ての場となるには休日や夜間など連続性に欠ける点がある。

また、出産は生活の場から医療施設に移行し、妊娠出産育児を支える支援者が病院の医師、助産師等で日常生活の場に存在せずに、不安があれば受診しなくてはならないことになるため「病院に行くほどでもない不安や疑問」を解消する場所がわからないという状況が生まれていると言える。医療施設は大抵の場合助産師は交代制で、場面での断片的な関わりとなりやすく、連続性に欠ける面がある。また、地域で開業する助産師も母乳ケアなど個別で

の相談などの関わりが多く、分娩があり多忙で母親同士をつなげ育児を共有する関わりには至りにくい。

以上の事から、母たちは妊娠、出産、育児を身近にかつ気軽に語り合い、同じ立場の人と出会い、子どもと一緒に育み、相談できる場を求めていることが分かった。筆者の実践の取り組みは時代の要請に合い、出産する女性の求める支援に適合する取り組みであると言える。

2. 実践の効果

妊娠期の不安の中には、「直接お腹をさわってもらおうとすごく安心出来ました」と回答しているものがある。日々の実践の中でも2人目の妊娠中にも関わらず、初めて触れてもらったというケースもあり、腹部に触れて欲しいために来所するケースも増加している。現代の医療機関では「異常の早期発見」がポイントとなり、胎児は超音波検査などで健診を受けることになるため、妊婦健診では腹部の触診をする機会が少なくなっている。参加することにより役に立ったと思ったこととして、「妊娠中に安心できた」「出産に対する恐怖が薄れ楽しみに」という記述があり、妊娠中の講座の中で行う、個別での妊婦の腹部の触診や体調の確認、胎児の確認などは、医学的な正確さや根拠ではなく、精神的な安定や安らぎ、出産に向き合う自信へとつながるものであると考える。妊娠中に恐怖心や心配、不安ばかりを抱え、自分の身体への信頼をなくしては、出産と向き合うのに精神的にマイナスへと働く可能性がある。直接会話の中で腹部の張りや冷えなど身体の状態を伝え、日々の体調管理を具体的に説明し、自己管理できるように支援していることが安心感につながっていると考える。

妊娠期から関わりがあると、病院入院中、退院直後の不安にも対処可能であり、必要があれば訪問し具体的にその人の生活スタイルに合わせたアドバイスを行うことで育児が円滑にスタートできる。出産後1カ月以内は育児に慣れず不安を抱えやすい⁽⁴⁾ことが報告されているが、この時期を切れ目なく支えることが求められていることがわかる。

また、「子どもの成長を共感し合うことができた。」「先生や他のママ達の客観的な意見で、子どもの新たな面や子どもの気持ちや考えに気づくことが出来ました。」等の回答は、母親が子どもを通し、他の母たちと育児を共感し、お互いの子どもの成長を喜び共に育ちあえるグループとして成熟してきたことからの言葉であると考えられる。以上のことから、定期的に妊娠出産育児を学習し、同じ立場の人に出会う機会やグループを成熟させ育てる関わりは現代の社会状況の中では重要で、効果もあることが分かった。

3. 課題と限界

今回の調査は実践を開始し2年間であり、調査対象者の数も少数である。今後さらに実践を重ねていく必要がある。地域における妊娠期からの切れ目ない支援は、筆者の調べたところこれまでに実践を報告されたものではなく、具体的な評価を他と比較することができていない。さらに筆者の研究は実践が先行し、客観的に評価する機会が少なくないと言える。今後実践を継続していく上で、客観的な評価方法を考える必要がある。

実践を広げ、各地で切れ目ない育児支援が展開されるようさらにプログラムを精選し検討を重ねる必要がある。

VI. 謝辞

調査にあたり育児の忙しい合間を縫って回答にご協力いただいたお母様とお子様へ深く感謝いたします。

文献

1. 厚生労働省：「平成26年度厚生労働省予算概算要求の主要事項」（2014.5. 20検索）

<http://www.mhlw.go.jp/wp/yosan/yosan/14syokan/02.html>

2. 厚生労働省：「平成25年版厚生労働白書」（2014. 5. 20検索）
<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/89-123>
3. 内閣府：「平成26年版少子化社会対策白書」（2014. 5. 20検索）
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2014/26pdfhonpen/26honpen.html>
4. 原田正文：「子育ての変貌と次世代育成支援—兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防—」，名古屋大学出版会，愛知，2006
5. 岡居久代，原田正文：周産期における継続した育児支援～周産期育児支援プログラムの提案　小児保健研究講演集　2008
6. 岡居久代：「乳児を育てる母親の育児支援ニーズ～現代の乳児を育てる母の希望する育児支援と不安の現状～」白鳳女子短期大学研究紀要第5号2010
7. 岡いくよ：「close up　母と子、そして家族の支援の場所『マタニティガーデン』をオープンしました」助産雑誌vol66, 2012, 154-159
8. 大阪市人口動態統計：<http://www.city.osaka.lg.jp/kenko/page/0000012652.html>（2014. 5. 25検索）
9. 伊藤徳馬：「親支援プログラムを利用した地域全体への育児支援」，母子保健情報第67号2013. 11月
10. 吉田弘道：「育児不安研究の現状と課題」専修人間科学論集心理学編Vol2No.1.2012
11. 川村千恵子，石原あや，森圭子：「母親の妊娠・出産・育児にまつわる体験の『語り』の意味づけ—育児経験のある助産師によるナラティブ・アプローチ—」日本保健医療行動科学会年報Vol. 24, 2009. 6
12. 徳田治子：「ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から」発達心理学研究2004, 第15巻, 第1号, 13-26